

# 対人関係促進技法としての「2人で絵を画く」技法についての検討

福井 康之

(教育心理学研究室)

(1989年10月11日受理)

## はじめに

人格成熟促進あるいは対人関係技術の習得を目標とした授業の必要性から、教育心理学科開講の自由選択科目の一つとして、グループ体験学習の授業を開設してきた。この授業の目的やカリキュラム内容の詳細については、すでに、中間報告の形で福井(1981)に発表してある。その報告以来、プログラムの配列順序や内容については若干の補正がなされているが、基本的には、その主旨を貫徹して、この授業を毎年度継続実施してきた。

1977年度後期の「青年期の諸問題」と1978年度前期の「臨床心理学演習」の授業科目を受講生の了解のもとに、グループ体験学習のプログラムとして実施して以来、毎年、同科目を前期は主として教育心理学専修3回生を中心にした受講生、後期はその他の3・4回生の自由選択科目として受講する学生のために試行的に開講してきた。

1982年度前期より、この授業形態を定着させ、新たに「教育臨床心理学」の授業科目名のもとに、毎年1回継続実施してきた。

1977年度から1989年度までの13年間に、途中、1986年度は筆者の文部省在外研究員としての海外出張のため休講したが、計14回開講し、各回とも11～14セッション(1セッション=100分授業時間)で延176セッションとなり、受講学生は、単位を授与した者に限定しても390名になる。

13年間の14回にわたるプログラムの全容については、福井(1989)に概略報告したが、授業の成果やプログラムの改善などについて、全体的に検討すべき時期にきている。

本稿はその端緒として、第1回目を除き13回のプログラムの全てに実施されている「2人で絵を画く」技法について若干の検討を試みたものである。

この技法は、筆者が1978年夏期休暇中に、人間関係研究会主催のAuw, A博士のワークショップに参加した際に習得したものであり、以後、実施面で若干の工夫をしながら、毎年実施している自家薬籠中の技法の一つである。

## この技法のグループ体験としての意義

心理臨床の場において、絵画を手段にして何らかの成果を得る目的は二つに大別できる。一つは診断を目的とし、他の一つは治療ないし人格成熟を意図したものである。「2人で絵を画く」技法で作成された絵画は、診断を目的にはしていないが、絵画による診断法の実際から得られている知見は、本技法の意義を検討することに有効であるかもしれない。

絵画による診断は、TAT やロールシャッハ図版のように予め作成されたものを使用する投影法テストは別として、被検査者が自由にあるいは何らかの指示のもとに絵を画くものとして、描画法という名称で一括されている。代表的なものとして、Koch, C の樹木画 (バウム・テスト)、Goodenough, F. L の人物画テスト、Buck, J. の家・木・人テスト (HTP) などがあり、中井久夫氏の考案による「風景構成法」も注目されている。これらはいずれも画くべき対象を指定している。

一方、治療的な意味合いをさらに付加させたものとして、単に診断するというだけでなく、実施者が治療者と同一人である場合は、必然的に、画かれた絵をクライアントからの治療者へのメッセージとして理解し、治療関係を深め、進展させるものとして活用されている。近時、家族療法的アプローチの必要性から、家族描画法が注目されていて、家族画法 (DAF, FDT)、動的家族画法 (KFD)、合同動的家族画法 (CKFD) などがある。しかし、「2人で絵を画く」技法では、家族画が画かれたケースは見られない。

さらに、積極的に、治療者とクライアントとの非言語的コミュニケーションの媒介として、描画を活用し、両者のイメージの交流を図り、治療効果を期待するものとして、Naumburg, M のなぐり描き法 (scribble technique) や Winnicott, D. W の squiggle technique が使われており、わが国では、中里均氏の考案による、治療者が画用紙の画面を分割して、クライアントと交替で好きな色彩を塗り込んでいく「交互色彩分割法」がある。これらは治療者とクライアントという関係ではあるが、2人が共同で描画にかかわり、2者間の人間関係の深化と進展のプロセスの経験を他の人間関係にも結果的に学習転移をさせるという点で、「2人で絵を画く」技法と共通したところがある。また、本技法のように自由画でなく、これらの技法のように画くべきものを指定するという方法を工夫するアイデアを提供しているものともいえる。

しかし、治療としての描画法は、絵画に限らず、彫刻、粘土細工、陶芸、その他の造形美術はもちろん、音楽、ダンス、演劇など、芸術活動の持つ生産的、創造的、美的意識の発露と高揚が、生命活動や生活感情などを高めていくことを活用している。なかでも、サイコドラマや箱庭療法などは、芸術療法 (art therapy) としての独自の領域を形成している。これらが目的としている効果は、中野久夫 (1970) によると、心理的な安定による適応、自己破壊傾向を挫折させる、欲求を象徴的に表現し理解する、創意工夫により自我が強化される、葛藤が表現されるので不安が減少するといったことがあるとしている。さらにこれ以外に大きな効果として指摘できることは、自己に対する洞察が得られることであろう。

これらの絵画療法ないし描画法は、精神障害者や不適応といったなんらかの問題行動を示すクライアントが、治療者と1対1の関係の中で継続的に何度も期間を置いて画くという点で、対人関係の改善や自己実現を目標にした人格成熟促進プログラムの一環として、偶然ペアになったメンバー同士で一回限りしか画かないという、この「2人で絵を画く」技法とは、直接比較にならないものだといえよう。

むしろ、複数のメンバーで一つの絵を完成させたり、対人関係の技能の習得や他者との関係の中での自己洞察といった目的を持つものとして、集団絵画療法といわれている技法がこれに近いと思える。もちろん、何回も継続し、2人だけでなく、数人でグループを構成するという点が異なるが、グループ内で自発的に他者と共同で自己表現をすることにより、集団の中での自己洞察を得たり、自己と他者の関係のあり方に気づくという点からは、この「2人で絵を画く」技法は、むしろ、集団絵画療法の一技法といってもよいだろう。

この技法の体験がどのような効果をもたらしているかを示すものとして、レポートの記述から1部を抜粋してみる。

「この実習で学んだことは、人とつきあう際、相手の心をよみとるには、自分自身が真剣でなければならない。たとえ画き始めがバラバラであったとしても、お互いが相手の様子から相手の心を理解してゆこうとすれば、おのずと協調してゆけるであろうと思うからです。

たとえ、自分の感性と合わない人であっても、お互いに歩み合う努力をすれば近づけるのではないか。今回の経験を大切にしたいものです。」

「お互いを知るといふか、理解するといふことができたように思える。あまり話をしたこともなかった2人が、絵をかいていくにつれて、昔からの友人のような気分になっていくのは不思議だった。かき終えた後は何となく心が通じたような、もっと深く知りあえたようなそんな気がした。」

### この技法の実施方法

参加者を無作為に2人宛組み合せ、各組2人に、1枚の画用紙とクレヨン箱を手渡し、2人で協力して1枚の絵を完成するよう指示する。

制限事項として、言語、身振り、サインなど明白なコミュニケーションの手段を使わないで、相手と無言で、絵を画きながら意志の疎通を図り、20分間で絵を完成するよう指示される。その際、室内や外の見える事物や風景を写生することは禁じられ、絵の内容は具象画、抽象画にこだわらず、また、コミック風、デザイン風でもどんな絵でもよいが、文字を2人のコミュニケーションの手段として書き込むことは禁じられる。

完成後は、全員の絵を前に並べて、作成の経緯について、2人に簡単な説明を求めるが、絵の上手、下手は問わないということが付け加えて述べられる。

用具は12色のクレヨン各1箱宛用意したが、年度によっては12色のクレパスの場合もあり、参加者の多いときは2人に1箱宛の場合もあった。なお、鉛筆などであらかじめ下書きをして色を塗るのではなく、クレヨンで直接絵を画き始めるよう注意しておく。

実施に際しては、画用紙(35~40×25~30cm)とクレヨン箱を教室に持参して、「今日は2人で絵を画いてもらいます」と言い、できるだけ男女のペアになるよう配慮して、絵合せやカードなどを使って、ペアが偶然の組み合せになるようにする。その際「どんな絵を画くかを打合せしないよう」に言う。

ペアができれば、各組ともできるだけ他の組の絵が見えないように、机を2人で左右に並べて平行して座るように、窓際や壁に向かって机を配置してから、画用紙とクレヨン箱を手渡し。それから前記のインストラクションにより指示をし、始めの合図で、それぞれのペアは無言で絵を画くように求められる。画用紙の方向については質問があれば、縦でも横でも自由に使うと言う。

すぐに画き始めることは難しく、どのようにどちらから画き始めるか双方が苦慮する。5分間ぐらい、お互いに相手の様子をうかがっているペアもなかにはあったが、大体2~3分ぐらい経過すると、たいていどちらかが、画用紙にクレヨンで色をつけ始める。

5分前と1分前にその旨を告げ、絵を完成するよう指示する。20分以前に作業を終えているペアには、なお一層仕上げをするよう指示する。インストラクターは、20分の間はそれぞれのペ

アの絵の進行具合を巡視して観察しておき、コメントのため必要な事項をメモしておく。

20分間経過すると終了の合図を告げ、それぞれのペアーの座っている側の絵の下方に氏名を記入するように言い、2人で何を画くつもりだったかなどを自由に話し合うようにする。その際、最近のワークショップでは、2人で話して、絵に画題をつけて上部に記入するようにしているが、1989年度には画題を記入させている。

5～10分程度ペアーで話した後、全部の絵を全員に見えるよう黒板に並べるか、マグネット留め具で黒板に張り出すかして前に展示する。全員椅子を移動させて、ペアー同士並んで、絵のよく見える位置に座る。インストラクターは適宜指定して、順次その絵を画いたペアーに前に出てきて、全員に説明するように求める。言葉を使わないで、どのような風に2人が察し合って画き、何を画き、どのようにして1枚の絵になるよう工夫したかに主眼を置いて発表させ、また質問をして、2人の関係のあり方についてコメントする。その際、画かれた絵の内容や形式から双方の性格を解釈することのないよう特に配慮し、絵を画くことを通じてお互いがどのように理解し合えたか、また楽しみながら画けたかということに焦点をあてて質問し、コメントする。

## この技法で画かれた絵の分析

### 1 分析の対象となった絵画

作成された絵は記念にペアーのどちらかが持ち帰るようにしていたが、どちらか一方だけが持ち帰るのに遠慮があったり、作品としては双方ともに十分力量が発揮できない条件設定のため不満感があり、絵を画くことがあまり得意でない者も多数いて、記念に持ち帰って飾るほどの出来栄えでもないらしく、筆者の手元に残るようになり、1980年頃からは、筆者の方から記念に戴いて置くことと了解を求めて、自然に手元に保存されるようになった。

第1表 「2人で絵を画く」技法の実施状況と保存絵画枚数

保存枚数中( )は風景画の枚数

開講年度	開講科目名	全実施回数	実施順(回目)	実施月日	当日出席者数	絵画保存枚数	単位取得者数	備考
1977 後期	青年期の諸問題	11					23	「2人で絵を画く」実施せず
1978 前期	臨床心理学演習	12	12	9/29	13	6 (4)	15	他に1枚筆者と作成
1978 後期	青年期の諸問題	12	6	12/12	21	10 (6)	21	他に1枚筆者と作成
1979 前期	臨床心理学演習	14	10	6/15	11	3 (2)	11	他に1枚筆者と作成 他に2枚保存されず
1979 後期	青年期の諸問題	11	11	2/4	10	2 (1)	17	他に3枚保存されず
1980 後期	青年期の諸問題	11	8	1/14	40	20 (13)	41	
1981 後期	青年期の諸問題	12	8	1/14	33	16 (10)	36	他に1枚筆者と作成
1982 前期	教育臨床心理学	14	8	6/1	27	13 (6)	28	他に1枚筆者と作成
1983 前期	教育臨床心理学	11	8	6/17	43	11 (8)	48	各4人で1枚画く 1グループのみ 3人 1名は筆者に協力して世話係
1984 前期	教育臨床心理学	14	5	5/17	45	21 (15)	48	1枚は保存されず
1985 前期	教育臨床心理学	14	6	5/21	51	25 (14)	50	1名は筆者と協力して世話係後 で全員の絵を観察コメントする
1986	休講	—						(筆者在外研究員として10か月出張のため開講できず)
1987 前期	教育臨床心理学	14	3	4/27	12	6 (2)	13	
1988 前期	教育臨床心理学	13	2	4/25	20	10 (5)	20	
1989 前期	教育臨床心理学	13	3	5/19	17	8 (2)	19	他に1枚筆者と作成

結果的にそのような事情で筆者が保存していた絵を整理して、今回の分析の対象とした。この技法の実施状況と保存絵画の枚数などを一覧にしたのが第1表である。

備考に記したように、出席者が奇数の場合、1名はインストラクターである筆者と2人で絵を画くか、参加者多数の場合にインストラクターの助手として、世話をしたり、各ペアーを観察記録する手伝いをしている。1983年度は出席者多数のため、用具の不足や時間内でコメントする余裕のないため4人で1枚の絵を画くというバリエーションで実施している。1987年度には希望により全セッション教官が1名参加し、筆者と2人で絵を画いているが、出席者が奇数のときに筆者と画いた学生の絵と同様に、分析の対象から除外してある。さらに、1979年度の前・後期とも保存絵画が少ないので分析から除外した。

なお、各年度とも全てのセッションについて、出席した学生は次週に簡単に感想文程度のレポートを毎回提出させている。これは毎セッション体験したものを言語化して意識化して定着させるためと、提出されたレポートと出席回数により単位認定をするためである。したがって「2人で絵を画く」技法のセッションのレポートも全て保管されていて、絵の下に書かれた氏名と照合して、絵を画いたペアーがどのような感想を書いているか通覧することができた。

## 2 分析の目的

この技法が実施された各年度のプログラム中の配列順序は第1表の実施順からわかるとおり、当初は最後の方のセッションで実施していたが、序々にプログラムの中頃となり、最近では、初期の頃に実施されている。その理由は、当初はコンセンサス・ゲームで多人数のグループ体験を重ねた後に2人の関係のとり方を体験学習するというプログラム全体の構想から、この技法が位置づけられていた。

約10年前の青年たちは、多数の集団の中で個人が行動することは比較的容易であり、2者関係を協力的に持つことが困難であった。2者関係では、積極的な自己主張や気の合った者同士の深い関係を求めており、そうでない場合は、お互いに傷つき合って、2者関係をさわやかに誰とでも保つということができにくかった。ところが、最近の青年たちは、むしろ、2者関係に人間的な深いかわりを求めなくなって、さわやかに誰とでも協力的な関係を持つことが習慣化してきている。私的な関係は別として、組織の中での公的な2者関係や友人としての関係の持ち方は、相互依存的であり、トラブルを惹き起こさないように心懸けている。そのためか、多人数のグループや社会的な3者関係への関与の仕方が消極的で自己主張に乏しい。この様な時代的背景を反映して、まず、2人の関係のとり方を確認させておいてから、多人数のグループ体験へと移行する方がよいという筆者の直観的な判断からである。

この技法の検討の一つとして、今回は、この2者関係の持ち方の時代的変遷が、保存されている絵画にどのような姿でその変化の様態を示しているかを分析して、この技法の実施方法が現行のまま、今後も意味があるのか検討する資料の一つとしたい。

## 3 分析の方法

課題の目標は協力して2人が画いた絵が統合されて、1枚のまとまった絵になるということである。絵の上手、下手は問わないということだが、それは描画上の技術的な問題であり、協力してうまく2人の関係が進行すれば、左右のバランス（構成・事物の配置・色彩の濃淡や色の数・描線の太さなど）のある安定した、創造性のある、色彩感覚豊かで構図の優れた美的感覚の優れた絵になることが期待される。しかも、2人で画いていても、あたかも1人で画いたような絵になるか、または2人で楽しみながら画面一杯に様々な図柄が画き込まれたものになるだろうと予

想される。

これに反して、2人の関係のとり方がうまくいかない場合、左右のバランスに欠けた分割された画風になり、双方が左右別々に上記の要素の異なった絵ができ、一つの絵としてまとめるために苦勞することになる。

また、どのような内容のものが、どのような形式で画かれているかを、描画法の分析に準じた分類を年代順に一覧にし、その変化を概観することにする。

#### 4 分析の結果と考察

第2表は年代順に、左右の画風の異なるもの、様々な事物が書き込まれているもの、全体的に統合されて左右が調和しているものの3つに全ての絵を分類したものである。

第2表 画風の差異による分類 ( )内は%

開講年度	対象絵画数	左右異なる画風	全雑体的画に乱	左全右体別調な和
1978前	6	0(—)	2(33)	4(67)
1978後	10	5(50)	2(20)	3(30)
1980	20	9(45)	1(5)	10(50)
1981	16	4(25)	1(6)	11(69)
1982	13	3(23)	8(62)	2(15)
1983	11	3(27)	0(—)	8(73)
1984	21	5(24)	3(14)	13(62)
1985	25	5(20)	8(32)	12(48)
1987	6	1(17)	3(50)	2(33)
1988	10	0(—)	1(10)	9(90)
1989	8	0(—)	2(25)	6(75)
計	146	35(24)	31(21)	80(55)

これらの分類に年代的な変化が見られるかの連関を  $\chi^2$  検定してみると、下記のとおり、

$$\chi^2 = 42.924^{**} \quad df = (3-1)(11-1) = 20 \quad P < 0.005$$

で、0.1%水準には達しないが0.5%水準で有意差がみられた。第2表からみて年代が新しくなるにつれて、左右アンバランスな画風が減少していることが判る。

2人で1枚の絵にするにはどちらかがあまり突飛な絵を画くと片方が、それについていけなくなったり、何を画いているのか判らなくなる。大抵の場合、最初に木や花を画くことが多く、それに山や川が書き込まれると、必然的に風景画になり易い。常識的で健全なアプローチといえる。各年代順に画かれた絵のうち風景画と考えられるものの枚数を第1表の絵画保存枚数の次に( )で示しておいた。風景画と分類した基準は、空があり、家や木が画かれて、山、川、道などがあり、人物や動物がいるか、または海辺や海上を画いたもので遠近のあるパースペクティブなもので、そのような画風でも、画面中に鬼や小人など実在しない事物や動物が画かれている場合は除いた。また、水中を画いたものや動物園、遊園地あるいは空想上の場所を画いたもので、パースペクティブなものでも除いた。風景画とその他のものの比率の差の検定をすると、

$$\chi^2 = 28.11^{**} \quad df = (11-1)(2-1) = 10 \quad P < 0.005$$

で有意な差がみられた。年代によって差があるが、1983年には保存枚数に比して風景画が多いのは4人で画いているという特殊事情がある。分類上の数値だけではその傾向が判然としないので、年代順に風景画（a列）とそうでないもの（b列）を例として図版に示した。

年代の古いものは風景画やそれ以外のものに特異なものが多く、2人で画いていても個性的な絵が多いといえる。年代が新しくなるにつれて、調和がとれているが無難な絵を画くようになり、対人関係のとり方も同様な傾向を示すことを暗示しているようだ。

第3表 年代順の画風の形式分析

（ ）内は%

開 講 年 度	対 象 絵 画 数	水平 線 が 引 か れ て い る	真 中 に 物 ・ 人	真 中 に 家	真 中 に 道	真 中 に 川	真 中 に 池	左 右 に 二 つ の 山	三 個 以 上 の 山
1978前	6	1(17)	5(83)	0(—)	0(—)	0(—)	0(—)	1(17)	0(—)
1978後	10	1(10)	2(20)	0(—)	2(20)	2(20)	1(10)	1(10)	5(50)
1980	20	2(10)	5(25)	1(5)	4(20)	2(10)	1(5)	2(10)	3(15)
1981	16	3(19)	4(25)	0(—)	1(6)	2(13)	1(6)	1(6)	4(25)
1982	13	2(15)	3(23)	0(—)	2(15)	1(8)	0(—)	2(15)	1(8)
1983	11	0(—)	1(9)	0(—)	2(18)	0(—)	0(—)	0(—)	4(36)
1984	21	0(—)	1(5)	1(5)	3(14)	0(—)	0(—)	4(19)	3(14)
1985	25	4(16)	6(24)	0(—)	2(8)	0(—)	1(4)	0(—)	3(12)
1987	6	0(—)	2(33)	0(—)	1(17)	0(—)	1(17)	2(33)	0(—)
1988	10	2(20)	4(40)	2(20)	0(—)	1(10)	1(10)	1(10)	0(—)
1989	8	4(50)	2(25)	0(—)	0(—)	1(13)	0(—)	0(—)	0(—)
計	146	19(13)	35(24)	4(8)	17(12)	9(6)	6(4)	14(10)	23(16)

第3表は、これらの絵を年代順に形式分析したものであるが、傾向としては古い年代には、真中に川や道などで画面を分割しているが、年代が新しくなると画面を余り分割しないで、左右を突切って水平線を引く絵が増加してくることが予想される。これは相手の領域に侵入することに抵抗感がないのか、どちらかが線を引くと容易にそれに同調してしまうようである。しかし、真中に事物や人物を画いて双方の絵を結合しようとする試みは、年代に関係なく見られるようである。真中に道が画かれている場合、両者を分割しているのか、結合しているのかを見分ける必要がありそうだ。

次に、どのような内容のものが画かれるのかを年代順に分類したのが第4表である。風景画が多いせいか「空」が描かれているものが圧倒的に多い。総出現頻度の多い順から配列してあるが、出現率（%）は同種のもので複数個あっても1つとし、年度別に対象絵画数で除してある。名称の右肩に記してある数字は「風景構成法」で指示される描画順である。2人で自由に画く場合は田（野原を含む）や石（岩を含む）はあまり画かれることなく、石はほとんどが花壇の囲いとして画かれるにすぎない。

教育学部の学生は女子が多いので、花が多く画かれるのはそのせいかもしれない。昆虫として分類してあるのは蝶が多い。また、人や動物などが画かれない絵もあり、柵や塀など枠や囲いを

第4表 描画されている内容の年代順の分類

( ) 内は%

開 講 年 度	対 象 年 画 数	空花 <sup>⑥</sup> 雲木人家 <sup>⑤</sup> 山 <sup>②</sup> 動物 <sup>⑦</sup> 道 <sup>④</sup> 池海川 <sup>①</sup>										乗物石 <sup>⑧</sup> 田 <sup>③</sup> 夜雨					囲 い ( 柵 ・ 塀 など)								
		鳥	獸	魚	昆	湖	飛 行 機 ( 船 ・ ロ ケ ット	船	車	石	田	夜	雨	景	天										
1978前	6	4 (67)	1 (17)	3 (50)	3 (50)	2 (33)	3 (50)	2 (33)	3 (50)	1 (17)	1 (17)	1 (17)	0 (—)	2 (33)	1 (17)	0 (—)	1 (17)	1 (17)	1 (17)	1 (17)	0 (—)	1 (17)	0 (—)	0 (—)	
1978後	10	8 (80)	5 (50)	4 (40)	6 (60)	3 (30)	5 (50)	7 (70)	5 (50)	5 (50)	3 (30)	1 (10)	5 (50)	2 (20)	3 (30)	3 (30)	1 (10)	2 (20)	2 (20)	2 (20)	3 (30)	0 (—)	0 (—)	3 (30)	
1980	20	17 (85)	13 (65)	10 (50)	11 (55)	11 (55)	12 (60)	11 (55)	11 (55)	6 (30)	2 (10)	2 (10)	9 (45)	6 (30)	3 (15)	3 (15)	1 (5)	5 (25)	3 (15)	4 (20)	2 (10)	0 (—)	1 (5)	2 (10)	
1981	16	11 (69)	5 (31)	9 (56)	6 (38)	7 (44)	5 (31)	10 (63)	6 (38)	3 (19)	2 (13)	1 (6)	4 (25)	2 (13)	4 (25)	3 (19)	4 (25)	4 (25)	2 (13)	0 (—)	3 (19)	0 (—)	0 (—)	1 (6)	
1982	13	11 (85)	8 (62)	5 (38)	8 (62)	8 (62)	7 (54)	4 (31)	7 (54)	5 (38)	7 (54)	2 (15)	5 (38)	3 (23)	4 (31)	3 (23)	4 (31)	3 (23)	5 (38)	2 (15)	1 (8)	2 (15)	0 (—)	3 (23)	
1983	11	8 (73)	9 (82)	6 (55)	6 (55)	9 (82)	4 (36)	5 (45)	1 (9)	4 (36)	2 (18)	3 (27)	3 (27)	4 (36)	1 (9)	2 (18)	3 (27)	1 (9)	1 (9)	0 (—)	2 (18)	1 (9)	2 (18)	2 (18)	
1984	21	16 (76)	15 (71)	11 (52)	15 (71)	11 (52)	12 (57)	9 (43)	8 (38)	5 (24)	10 (48)	8 (38)	7 (33)	5 (24)	6 (29)	9 (43)	8 (38)	4 (19)	4 (19)	4 (20)	2 (10)	3 (14)	1 (5)	0 (—)	5 (24)
1985	25	19 (76)	17 (68)	14 (56)	14 (56)	16 (64)	12 (48)	12 (48)	14 (56)	13 (52)	10 (40)	9 (36)	9 (36)	12 (48)	4 (16)	2 (8)	4 (16)	1 (4)	1 (4)	6 (24)	1 (4)	3 (12)	1 (4)	5 (20)	
1987	6	5 (83)	4 (67)	5 (83)	3 (50)	4 (67)	4 (67)	3 (50)	1 (17)	2 (33)	1 (17)	1 (17)	3 (50)	2 (33)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	1 (17)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	1 (17)	1 (17)	
1988	10	8 (80)	8 (80)	6 (60)	6 (60)	4 (40)	3 (30)	4 (40)	3 (30)	4 (40)	5 (50)	4 (40)	4 (40)	3 (30)	2 (20)	4 (40)	1 (10)	1 (10)	1 (10)	1 (10)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	1 (10)	
1989	8	7 (89)	3 (38)	6 (75)	4 (50)	6 (75)	3 (38)	2 (25)	3 (38)	2 (25)	7 (89)	1 (13)	1 (13)	3 (38)	4 (50)	2 (25)	1 (13)	5 (63)	0 (—)	2 (25)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	2 (25)	
計	146	114 (78)	88 (60)	84 (58)	82 (56)	81 (55)	70 (48)	69 (47)	62 (42)	50 (34)	50 (34)	33 (23)	50 (34)	44 (30)	32 (22)	31 (21)	28 (19)	27 (18)	21 (14)	20 (13)	15 (10)	8 (5)	5 (3)	25 (17)	

書き込んでいる場合もあり、2人の関係のとり方の象徴的な解釈も可能であるが、これらの事物の出現率は年代による増減の明白な傾向はみられない。

夜景や雨天が画かれることは稀であり、風景の場合は、晴天であるばかりでなく、多く太陽が書き込まれている。特に最近のレポートには、まず最初に太陽を画いたという記述が見られ、現代っ子の明るさ志向のシンボルなのかも知れないと考え、特に太陽について別に集計をしてみたのが第5表である。

146枚中太陽が画かれている絵は82枚あり、全体の56%である。そのうちの丁度半数の41枚が左側、35%の29枚が右側、残りの15%の12枚は真中に画かれている。それぞれの太陽に画が描かれているものと、渦巻き状に画かれているものがあるが、全体の60%にあたる49個の太陽は円形であった。年代別に差があるか  $x^2$  検定してみたが、

$$x^2 = 14.156 \quad df = (11-1)(12-1) = 10 \quad 0.10 < P < 0.20$$

であり、統計的には年代順に増加しているという傾向を示していないことになる。

第5表 太陽が描かれている枚数

開講年度	対象絵画数	左					中					右					合計
		半円形	円形	顔形	渦巻	計	半円形	円形	顔形	渦巻	計	半円形	円形	顔形	渦巻	計	
1978前	6	—	2	1	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2 (33%)
1978後	10	—	1	1	—	1	2	—	—	—	2	1	1	—	—	2	5 (50%)
1980	20	1	2	2	—	3	2	—	—	—	2	1	—	—	—	1	6 (30%)
1981	16	—	3	1	—	3	1	1	—	—	2	3	1	—	—	4	9 (56%)
1982	13	3	2	1	—	5	1	—	—	—	1	1	1	—	—	2	8 (62%)
1983	11	2	1	1	—	3	—	—	—	—	—	3	—	—	—	3	6 (55%)
1984	21	3	4	2	1	7	3	—	—	—	3	1	4	1	1	5	15 (71%)
1985	25	3	5	3	3	8	1	1	—	1	2	—	3	1	1	3	13 (52%)
1987	6	—	2	—	1	2	—	—	—	—	—	2	1	1	—	3	5 (83%)
1988	10	1	3	—	2	4	—	—	—	—	—	—	2	—	2	2	6 (60%)
1989	8	1	2	2	—	3	—	—	—	—	—	—	4	2	1	4	7 (88%)
計	146	14	27	14	7	41	10	2	0	1	12	9	20	6	5	29	82 (56%)

ところが全体の出現率56%は他のワークショップでの絵画と比較すると（例えば愛大附属病院の看護婦では約40%の太陽の出現率）明らかに統計的に多いということが言える。太陽の象徴的な意味は、描画法では両親への依存を表すといわれている。学生たちは2者の対人関係の葛藤に直面すると退行して、無意識的に両親への依存欲求を出現させ、象徴的に太陽を画いて、事態の進展を図ろうとしていると推定できる。2人で絵を画くという事態では、描画そのものが幼児的な段階に退行している絵が多いことも確かである。

### 5 結論

「2人で絵を画く」技法の評価としては、ここで行った分析は不十分なものであり、対象として選んだ絵画も、最近のものは主として教育心理学専修生のものが多いという偏りを持っているので、年代的推移なのか、サンプルの母集団の違いなのか不明確である。他の集団でも同様の技法で講習会などを行っているので、それらの絵画も利用して比較検討してみる必要がある。

しかし、だんだんと余り個性的な絵を画かなくなってきた原因は、レポートから察すると絵が不得手だという理由づけで相手に依存してしまい、どちらか一方の主導のもとに無難な絵を画くようになってきているということらしい。

このような事態では、この技法のねらいとしている対人関係の葛藤をいかに主体的、創造的に克服していくかという意味を失っていくことにもなり、自由画を画くという形式を、もう少し工夫して、積極的に葛藤場面を導入して、2人でそれを克服していくような技法に変形する必要があるのではないかと、とりあえずの結論とでもいえるようだ。

### 参考文献

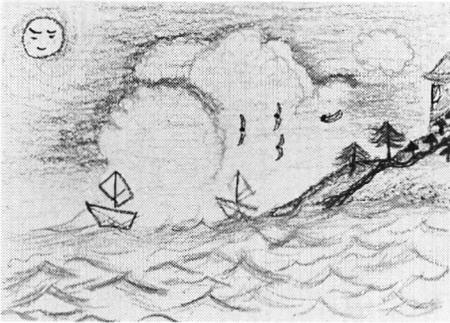
- 福井康之 (1981) 人格成熟促進のための授業として試みたグループ体験実習の検討 (佐治守夫・村上英治・福井康之編「グループ・アプローチの展開」誠信書房 124-154.)
- 福井康之 (1989) 人格成熟促進のための授業として試みたグループ体験実習のプログラム実施一覧 日本心理臨床学会第8回大会自主シンポジウム「学校教育システムの中でのグループ・アプローチ」配布資料
- 家族画研究会編 (1986~1989) 臨床描画研究I~IV. 金剛出版
- 中野久夫 (1970) 芸術心理学入門 造形社

高橋雅春（1974）描画テスト入門—HTPテスト 文教書院

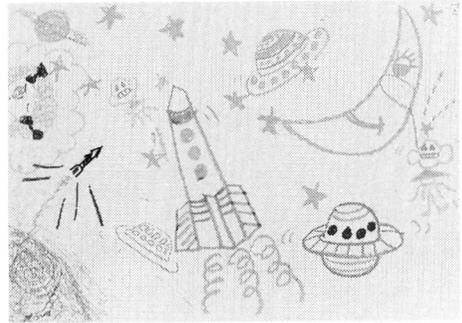
徳田良仁（1988）絵画療法（島藺安雄・保崎秀夫・徳田良仁・風祭元編「精神科治療学」メジカルビュー社 116—123.

山中康裕編（1984）風景構成法 中井久夫著作集別巻 岩崎学術出版社.

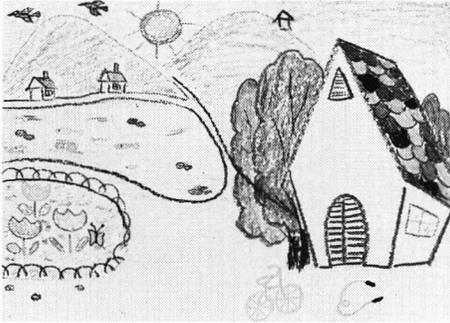
「2人で絵を画く」技法についての検討



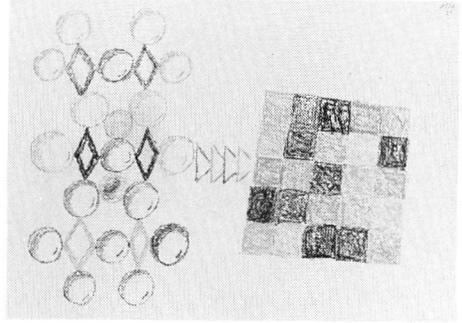
1978前  
(a)



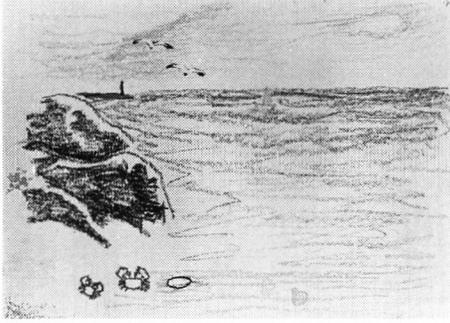
1978前  
(b)



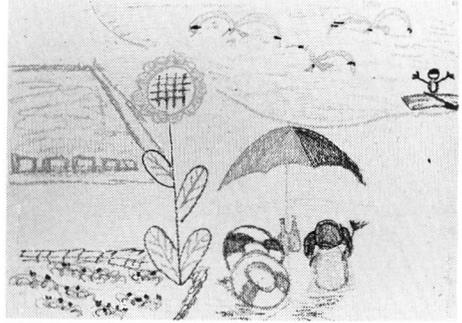
1978後  
(a)



1978後  
(b)



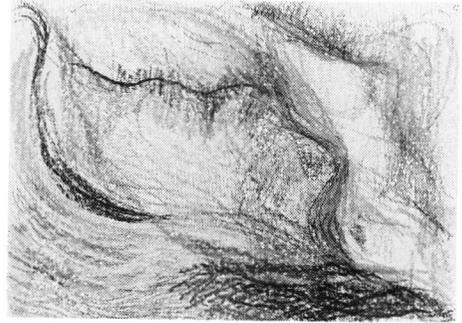
1980  
(a)



1980  
(b)



1981  
(a)



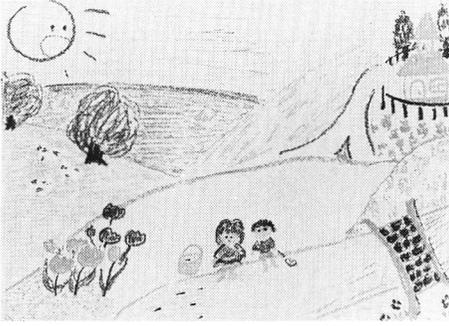
1981  
(b)



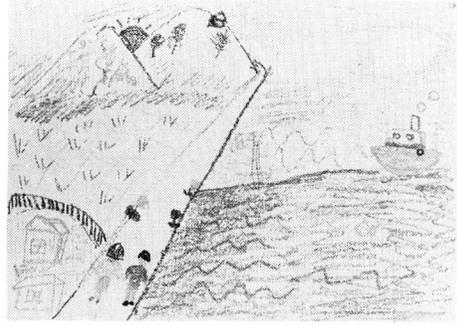
1982  
(a)



1982  
(b)



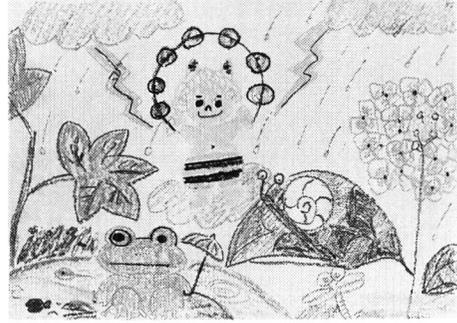
1984  
(a)



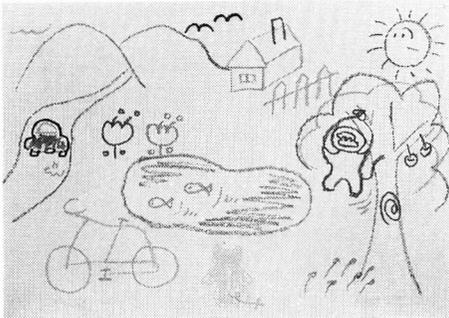
1984  
(b)



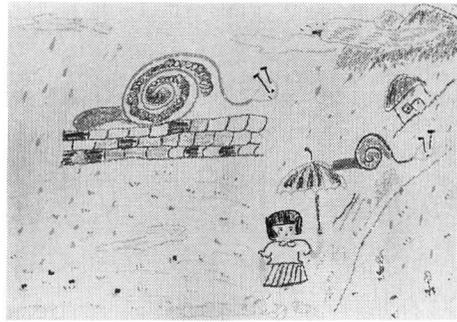
1985  
(a)



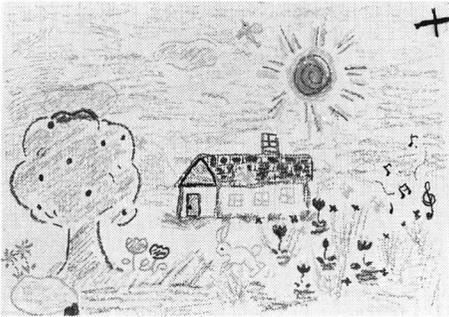
1985  
(b)



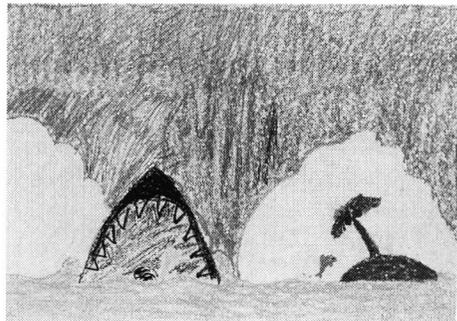
1987  
(a)



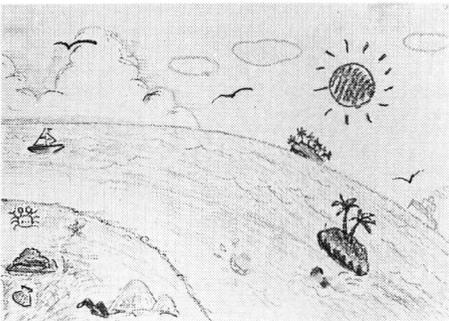
1987  
(b)



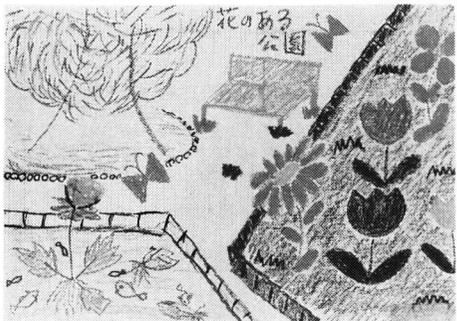
1988  
(a)



1988  
(b)



1989  
(a)



1989  
(b)